

聖書：ダニエル書 3：1～30

説教題：もしそうでなくても

日時：2014年11月30日

ダニエルの同僚、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは、この3章で大変な試みの中に置かれます。これはネブカデネザルが金の像を造ったことに始まりました。彼はバビロン州のドラの平野に高さ60キュビト、幅6キュビトの像を立てました。この金の像はネブカデネザルを表した像とは言われていません。ですから彼をたたえる記念碑的な像ではありませんでした。しかし王はこの像を拝むことを人々に強要します。つまり一つの宗教のもとに、帝国をより強固に統制しようとしたのでしょう。この像が「金」で造られたのは、前の章で見た幻の中でネブカデネザルが金の頭を指すと言われたことと関係していたかもしれません。

王は人を遣わして、太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官たちを召集します。そして彼らを奉獻式に出席させ、伝令官のもと、多くの楽器の音を合図に、皆がこれを拝むようにと命じます。もしひれ伏して拝まない者がいれば、その者はただちに火の燃える炉の中に投げ込むと脅しつつ。こうして外形的に人々の行動を強制し、統制することによって、心の中も支配しようとしたのです。この結果、7節で民はみな、楽器の音を聞いてひれ伏して拝んだとあります。ここには逆らえない雰囲気があります。国の偉い人たちがみな列席し、監視している中、皆が王の命じる行動を取っています。国全体が一色になるように求められています。

そしてダニエルの友人たちの敵対者たちがそこで活動しました。彼らは王に密告します。あの3人があなたの立てた像を拝んでいません！と。12節に「ここに、あなたが任命してバビロン州の事務をつかさどらせたユダヤ人シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴがおります。」とありますが、彼らがいかにこの3人の昇進を苦々しく思っていたかが伺えます。彼らにとっては、外国から来た者が自分たちを越えて高い地位に着いていることは面白くない。そんな彼らにとってチャンス到来です。カルデヤ人たちは訴えます。「王よ。この者たちはあなたを無視して、あなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝みもいたしません。」と。これを聞いたネブカデネザルは怒りたけり、3人のユダヤ人を呼び寄せます。そしてもし本当にその通り

なら、おまえたちをただちに火の燃える炉に投げ込むと宣言します。

この非常な試みの中でシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはどうしたでしょうか。16節以降を見ると、彼らはこのプレッシャーの中で少しも動じることなく、自分たちの信仰を告白しています。彼らは言います。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。」 まず彼らが述べているのは主の主権への信仰です。ネブカデネザルはここで思いのまま振る舞っています。自分に全権があるかのように振る舞っています。しかし3人はそうではないと言います。あなたが私たちをどう扱っても、主は私たちを救い出すことができる、と。主こそあなたを上回る絶対主権を持つ全能の神であると。だから我々は人を恐れるのではなく、神を恐れ、神にこそ従うという態度を表明したのです。

しかし彼らは続けて「しかし、もしそうでなくても」と述べます。彼らは今述べた通り、主の全能性と絶対主権を信じています。しかしだから主は必ず我々を火の燃える炉から救い出すとはまでは言っていません。主にそれはできると言うのは真実ですが、主が今回それをなさるかどうかはまだ分かりません。それは彼らが決めることではなく、主の自由に属することです。その主のお考えにより、自分たちが燃える炉に投げ込まれて助け出されないこともあり得るということを彼らは見ています。しかし彼らは言うのです。「もしそうでなくても、王よ。ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拜むこともしません。」と。

私たちは主に従う生活をしたと思いますが、常にその「結果」がどうなるかを心配するものです。雄々しく主に従って必ず祝福されるなら、迷わずそうします。しかしいつもそうなるとは限りません。むしろ難しい状況に追い込まれることがよくあります。そのため、私たちはその結果を予想して、妥協した行動を取ってしまいやすいものです。しかしこの3人が重要と考えていたことは、人間的に好ましい結果を得ることや目の前の危険から救われることではなく、まず主に服従する道を行くことでした。その結果、この世においても救われるかもしれません。主はそう導く力を持っておられます。しかしそうでないかもしれません。人々に迫害され、この世の祝福を失うかもしれません。それでも我々はその道を行くと3人は告白したのです。たとえ私たちが願わない状況が起こっても、主はそこに良いご計画を持

っておられる。最善の御心を備えておられる。そのことは主にお委ねして、私たちは主に従う道こそを行く、と。

果たして結果はどうだったのでしょうか。彼らは火の燃える炉の中に投げ込まれることになりました！良い方向には進みませんでした！しかも最悪の状況が発生します。王は怒りに満ちて、炉を普通より7倍熱くせよと命じます。また彼らは軍隊の中の力強い者たちによって縛られ、逃げ出せないようにされます。これでは助かりません！人間的に考えれば、このようにはっきり言わなかった方が良かったのではないか、かえってそれが裏目に出たのではないかと思われます。王の命令は厳しく、炉ははなはだ熱かったため、3人を連れて行った者たちは、その火炎に焼き殺されるほどでした。

しかしそこで驚くべきことが起こりました。何と火の中に投げ込まれた3人は焼け死ぬどころか、火の中でなわを解かれて歩いているように見えた。そして3人を投げ込んだはずなのに4人の者が見える。一体この4人目は誰なのでしょう。王は25節で「第四の者の姿は神々の子ようだ」と言っています。28節では「神は御使いを送った」とも言っています。よくこれは受肉前のキリストではないかと言われたりもします。またある人は御使いと取るのが良いと言います。果たしてどちらであるのか、それを決定できるほどにはっきりしたことは言われていません。しかしいずれであっても大切なメッセージは、神はこのようにして彼らと共にいて、彼らを守ってくださったということです。

考えるに値することは、神は私たちが危険に会わないように守るのではなく、危険のただ中で守ってくださるということです。イザヤ書43章2節：「あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」私たちが主に従う生活の中で非常事態に陥るかもしれません。しかしそうなったら、もう終わりなのではないのです。燃える炉に投げ込まれ、もう終わりかと思う状況で、主が共にいてくださる。ですから私たちはどんな苦しみの中でも、共にいて守ってくださるお方を信じて良いのです。主はそこでも私たちとともにいてくださるインマヌエルの神なのです。

そして私たちはこのアドベントの時、まさに私たちのただ中にまで下ってくださった方のことを思わずにいられません。イエス様は私たちの苦難のただ中に、そし

て私たちと同じ死にまでも下られました。この3人が投げ入れられた炉はまさに死の世界と言えますが、イエス様はそこまでも来て下さった。そしてそこさえもきよめ、死臭を取り去り、いのちに満ちる場として下さった。この死の世界まで下られた主を思うなら、主が共におられない苦難の場所は私たちにもはやないということが分かるのです。どんな時も私たちはこの4人目の守り手がともにいてくださることを仰ぎ見て良いのです。

これを見たネブカデネザルは「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。いと高き神のしもべたち。すぐ出て来なさい。」と言います。3人は火の中から出て来ましたが、火は彼らのからだには効き目がなく、その頭の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火のにおいもしませんでした。王はこれを見て、彼らの神をほめたたえます。そしてこの3人は一層高く上げられ、以前にはるかに勝る祝福にあずかる者となったのです。これはご自身に従う者に、主は私たちの思いをはるかに越えたさらにすぐれた祝福を用意しておられるということを象徴的に示すものでしょう。

私たちも主の民として歩む中で様々な試みに会うでしょう。この章と同じく、国家が国民を統制しようとして、ある宗教や儀式、儀礼を強要するかもしれません。これを拝まなければ殺す！国家に聞き従わなければ罰を与え、様々な権利を剥奪する！と。そのような事態に陥った時、主の民としてどう対応すべきか、私たちはこのダニエル書3章から学ぶことができます。またそのようなことが起きなくても、私たちは常に世からの挑戦と誘惑を受ける中に置かれています。すなわち神のことは後回しにして、ネブカデネザルの言葉に聞き、この世の祝福にあずかることを優先するのか、それともたとえこの世の祝福を失うことになっても、主に従うことを優先するのかという選択です。周りの人々が、我々と同じ道を行こう。神のことなんか後で考えよ。それよりもこっちの道にこそ祝福がある。おまえがそれでも神の道を行くなら、我々はおまえを見捨てるぞ！と迫って来る。その中で私たちはどうするのか。主に忠実に歩む時、この世の人々から、この章で見たような扱いを受けることがあります。火に投げ込まれるようなことも、その炉を7倍も熱くされるようなことも…。それでも私たちは主に第一の忠誠をささげて歩む者でしょうか。たとえ願ひ通りの結果に至らなくても、3人の言葉によれば「もしそうでなくても」、主に従う道を選択して進む者でしょうか。

しかし今日の章から改めて教えられることは、この主に従う道こそ、本当の意味での祝福の道であるということです。主に従う道には主が共にいてくださいます。そこは私たちが願った世界ではないかもしれませんが、主が苦難のただ中で私たちを守り、そこから私たちの思いを越えたもっと良い導き、一番良い導きを与えてくださる。私たちはそのことを信じて主に従いたい。自分の頭で先に全部を考えて悩み、妥協するのではなく、主を信頼し、安心して主に従いたい。今もし願った状態になくても、主は共にいて、そのただ中で守りと祝福を用意してくださっています。その主を信じて、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴのように、私たちの考えにまさる主が用意しておられる祝福に生かされる歩みへ導かれたいと思います。